フランスを旅する子どもたち（二）

――G. ブリュノ『二人の子供のフランス一周』とエクトール・マロ『家なき子』――

杉本圭子

エクトール・マロ（Hector Malot, 1830–1907）がその代表作『家なき子』（*Sans famille*, 1878）の出版に遡ること九年前（一八六九年）、ジュール・ヴェルヌの作品の出版社として知られるエッツェル社と出版契約を結んだとき、小説の仮題のひとつは『フランスをめぐる子どもたち』（« *Les enfants du tour de France* »）であったという。[1] 先の論文で、王政復古期からG. ブリュノ（フイエ夫人の筆名）（G. Bruno / Madame Fouillée, 1833—1923）の『二人の子供のフランス一周』（*Le Tour de la France par deux enfants*, 1877）出版までの間に、子供たちにフランス周遊の物語を通して自国の地理や歴史を教える教育的な読み物が多く書かれていたことを述べた。[2] マロはこの頃、子供向けの冒険小説『ロマン・カルブリス』（*Romain Kalbris*, 初出 1867）を書き上げたばかりだったが、『教育と娯楽の雑誌』（*Magasin d'éducation et de récréation*）を主宰していたエッツェル（Jules Hetzel, 1814–1886）が、朋友のジャン・マセ（Jean Macé, 1815–1894）やヴェルヌに子供向けの地理の読み物の執筆を依頼するかたわら、[3] マロに同様

の趣旨の物語を提案したのにはそうした背景がある。

『家なき子』の初稿は一八七〇年四月にいったん書き上げられたあと、『シエークル』誌（*Le Siècle*）での連載（一八七七年十二月―一八七八年四月）を機にほぼ全面に書き換えられ、最終的に一八七八年に、単行本として刊行された。[4] ブリュノの本と直接の影響関係はないと思われるが、ほぼ同じ時期に出版されたことでこの二冊が対比されて論じられることも多い。[5] この二冊は発売直後からたいへんな評判となり、おりしも一八八一年、一八八二年のジュール・フェリー法で公教育の原則が定められ、地理と歴史が義務教育のプログラムの中に組み入れられたこともあって、重版に重版を重ね、各国語に翻訳されたほか、諸外国でのフランス語の教材としても広く用いられた。パトリック・カバネルによれば、この二作は多くの追随作品を生んだことでも共通しており、フランスに限っても第一次世界大戦の時期までに十五作品近く、また両大戦間期にもさらに十作品近くの類似の「フランス周遊もの」が書かれた。[6] その中には出来のよいものも悪いものもあったが、主人公たちの家庭環境や舞台設定に関して多くの共通点があり、相互に具体的な引用やパロディの痕跡も認められるという。[7] いずれも後世に与えたインパクトの大きい作品であり、フランス児童文学の歴史の中でも確固たる位置を占めている。本稿ではこの二作品を先の論文でたどった王政復古期から七月王政期にかけての「周遊もの」の系譜の到達点と見なす立場から、先行作品の叙述の形式やテーマ群との連続性を検証し、そのうえで子供の教育をとりまく環境の変化など、時代の変化とともに、主人公の自己修養の物語にどのような変容がもたらされたかを、二作品を比較しながら論じてみたい。

「祖国」と「家族」の物語

二つの物語には多くの共通点がある。まず、主人公が孤児であるということである（少なくとも、物語開始の時点ではそう設定されている）[8]。『二人の子供のフランス一周』の主人公アンドレ（十四歳）とジュリヤン（七歳）の兄弟は、普仏戦争での敗北にともないプロイセン領となったファルスブールの町（ロレーヌ地方）を出て、フランス領に向かおうとする。その費用を捻出しようとして必死に働いた大工の父親は、足場から落ちて命を落とす。いまわの際に「フランス！」とひと言叫んだ父親の悲願は、息子たちが祖国の子供としての義務を知り、良心にしたがってそれを果たすことだった。母親もすでに亡くなっていたので、二人は音信不通になっていた父の弟を探し出して後見人になってもらうため、マルセイユ、ついでボルドーを目指す。ボルドーで再会した叔父のフランツは病み上がりのうえ、不幸にも財産のすべてを失っており、三人は旅費の節約のため、ブルターニュ半島沖～ノルマンディー沖を北上する船の上で働きながら故郷に向かう。最終的に兄弟はフランス国籍を回復するが、財産回復の手続きの必要が生じたために列車でパリに向かい、最終的にはかつての恩人、元操舵手ギヨームの住むオルレアネ地方（ロワール川中流域のオルレアンを中心とした地域）の農場に身を落ち着ける。初版の最終章（第一一九章）には「フランスが好き」（J'aime la France）とのタイトルが付され、フランツ、アンドレ、ジュリヤンとギヨームの一家が、手をたずさえて戦争で荒れ果てた農場を立て直すことを誓う。ジュリヤンが歓喜のあまり手をたたきながら「ぼくは心からフランスが好きだ！」と叫んで駆け回る場面が印象的である[9]。二人の兄弟は亡き父の願いをかなえたうえに、新たな故郷

と家族を手に入れたのだ。

いっぽう、『家なき子』のレミは赤ん坊のときにパリの街路に捨てられているところを、出稼ぎに来ていた石工のバルブランに拾われ、フランス中南部の寒村シャヴァノンで妻の「バルブラン母さん」に八歳まで育てられる。妻は貧しい暮らしの中でもレミに惜しみない愛情を注ぐが、戻ってきた夫は金銭上の理由のため、すぐにレミを孤児院に入れろと妻に迫る。窮地を救ったのは、かつてイタリアで高名なオペラ歌手として活躍していた動物旅芝居の座長、ヴィタリスだった。ヴィタリスとともにフランス中南部の荒涼とした山地や原野をまわるうちに、レミは知的にも肉体的にもたくましく成長していくが、厳しい自然環境の中で一匹、また一匹と仲間の動物たちを失った二人は生計をたてることが困難になり、老いたヴィタリスはパリに着いた直後、吹雪の中で息絶える。幸いにもパリ郊外の花作り農家（アキャン家）に保護され、家族の一員として迎え入れられたレミはつかの間の団らんを味わうが、あるとき花畑が雹（ひょう）の被害にあい、負債の返済ができなくなったアキャン氏は収監されてしまう。一家は離散の憂き目にあい、ふたりの兄弟、ふたりの姉妹はそれぞれフランス各地の親戚のもとへ送られる。再び寄る辺を失ったレミだが、それまでガロフォリというならず者の親方にこき使われていた、イタリア出身で楽器演奏の得意なマチアという仲間をえて、たった一匹残った犬のカピとともに興行を続けながら、各地に散り散りになったアキャン家の四きょうだいをたずねて回る。その過程で生みの親が自分を探していることを知り、マチアとともにロンドンへ渡る。最終的には、かつてヴィタリスが収監されたときに「白鳥号」という自家用船に迎え入れてくれたミリガン夫人という富裕なイギリス人女性の実子と判明するのだが、ミリガン家の遺産を狙う叔父ジェームズの妨害により、一時は密輸業者のドリスコルを本当の肉親だと思いこんだり、そのために巻き添えをくって窃盗の疑いをかけられたり、ディケンズばりの波

乱万丈な展開にも事欠かない。フランスの川と運河をたどって、スイスのヴヴェで夫人と実の弟に再会する場面は、今までの労苦に報いてあまりあるものであり、先祖代々のイギリスの土地で家督を継いだレミが、伴侶となったアキャン家の末娘リーズとならんでマチア、バルブラン母さん、アキャン氏ら、ゆかりの人々を招いてもてなす大団円の場面は、幸福の構図そのものである。

『家なき子』は本来高貴な血筋の主人公が他郷をさまよい、さまざまな試練にもまれるうちに、本来得るべき貴い地位を得るという、典型的な貴種流離譚である。『二人の子供のフランス一周』のほうは、ルーツ探しというよりルーツ回帰の物語で、主人公たちもごく一般の庶民階級（職人階級）に属する。共通するのは、本来の親や近い親戚が現れるまでの間、経験豊かな大人が庇護者となってかわるがわる若い主人公たちを導くということである。『家なき子』でいえば、まず第一に孤児院に送られそうになったレミを救った座長ヴィタリス。ヴィタリスは道中、レミと食べ物や毛布を分け合いながら、厳しさと愛情をもってレミに歌や読み書き、音楽、計算、外国語、そして生活の知恵を教えた。そのヴィタリスがトゥールーズで警官の横暴に抗議して逮捕され、収監された二か月の間には、ミリガン夫人が病弱な息子の話し相手として、レミに快適な船の住居と食べ物を提供し、フランス各地の伝説や歴史を語り聞かせてくれた。そしてヴィタリス亡きあとは、花作り農家のアキャンが二年間にわたり、自分の四人の子供と同じようにレミを育て、農作業の基本を教えこむと同時に、本を買い与えてレミの学習意欲をかきたてる。その後のアキャンの逮捕と不運な一家離散もまた、レミに新たな師にめぐり会う機会を与えた。アキャン家のきょうだいの一人、セヴェンヌ地方のヴァルスの炭坑で働くアレクシを訪ねたレミは、炭坑で運搬夫の仕事を手伝うことになり、そこで鉱物学と地質学に通じた〈先生（マジステール）〉というあだ名の老運搬夫に出会う。この運搬夫は出水事故でレミたちと地下に

閉じこめられた際、その知識によって一同を救うことになるのだが、彼もまたレミの知的成長に寄与した一人である。そうして行く先々で見聞を広めたレミは、今度は自ら師となって、連れのマチアに字の読み方と音楽の初歩を教える。そしてその後はふたりで知恵を出し合って悪い大人に立ち向かい、数々の難局を乗り越える。

いっぽう、『二人の子供のフランス一周』のアンドレとジュリヤンも、夜の闇に紛れて故郷の町を脱出し、ボルドーで叔父を見つけ出すまで、多くの人の善意に触れる。亡き父親の友人、木靴職人のエチエンヌ夫妻は、幼い兄弟たちの道行きを少しでも楽にしてやろうと、つましい生活の中でわずかな蓄えを兄弟に分け与え、身支度を整えてやる。森林監視人のフリッツは、折悪しく骨折していて自ら道案内はできなかったが、地図を使ってヴォージュ山脈越えのルートと、山中で道に迷わないためのこつを懇切丁寧に教えてくれた。おかげで兄弟は濃霧のたちこめる夜の山を越え、フランス領にたどりつく。フリッツの紹介してくれたロレーヌ地方の農婦は、ジュリヤンに乳搾りとバター造りの工程を教える。次いで農婦の親戚にあたるエピナルの未亡人は、高齢を理由に最初二人を家におくことをしぶるが、二人の礼儀正しさを知って徐々に心を開き、深い情愛を示すようになる。この未亡人（ジェルトリュド夫人）はもと教師で、鍵職人の修行に精を出すアンドレに大人のための夜間学校に通うことを勧め、土地の小学校に通い始めたジュリヤンには図書館から本を借りてこさせ、音読させ、難しい言葉の意味を教える。夫人のもとに滞在した一ヶ月の間に、アンドレは地元の製紙工場を見学し、ジュリヤンは夫人とともに訪れたエピナルの定期市でさまざまな商品（ガラス製品、エピナル画、楽器、刺繍、造花）に触れ、また夫人からロレーヌ地方の偉人たちの話を聞いて、土地に関する知識を深める。本書ではこうしたフランス各地での人との出会いを軸とする学びの機会が、作品全体に百科全書的知識を散りばめるための便宜的手段となっている。二人は押し付けでなく、ごく自然に知識を求め、

好奇心を満たしていく。大人はありったけの経験と知識をもってその欲求にこたえる。フランシュ・コンテ地方のブザンソンからローヌ・アルプ地方のヴァランスまで二人に付き添い、各地の産業と行商の心得を教えこむ行商人のジェルタル氏しかり、船の上で、沿岸の特色ある地域や町について語り聞かせる水夫のジェロームも、「ペルピニャン号」の船長もしかり、そして海の愉しさと危険を知りつくした「ポワトゥ号」の操舵手ギヨームしかり。それらに比べると叔父フランツの寄与の度合いは、破産によって行動を制限されてしまっていたこともあり、やや物足りない印象を与えるが、血のつながった親族が同じ船に乗っていること、しかもその職業が船大工であることは、故郷を離れて長い海上生活を送る二人の兄弟に、何物にも代えがたい安心感をもたらしたにちがいない。

こうして双方の物語において、父親と母親の不在を補う庇護者的な存在が次々と現れては年若い主人公たちに働きかけ、窮地から救ってくれる。ところが中には庇護者を装う悪人もいる。アンドレとジュリヤンがジェルトリュド夫人のもとを出て、ブザンソンまで同乗を頼んだ桶職人は、二人から乗車賃を取っておきながら、途中の旅籠でさんざん飲み、悪態をついたあげく、馬車の運転席で酔いつぶれて眠ってしまう。幸い、通りかかった憲兵たちに窮地を救われるが、これは二人にとって、むやみに人を信用してはならないという教訓になる。『家なき子』のレミはいちど、老いを自覚したヴィタリスによって、パリで浮浪児たちを使って荒稼ぎするガロフォリという親方（パドローネ）の手に預けられかける。これはディケンズの小説『オリヴァー・ツイスト』（一八三八）のフェイギン（ロンドンの貧民窟で孤児たちに盗みをはたらかせて儲けるユダヤ人）を思わせる人物で、子供を食い物にする悪党の典型である。[10] この旧知の同郷人の悪行を目の当たりにしたヴィタリスは、当然のことながら即座にレミを連れ帰る。また物語の終盤では、レミの実の親をかたるロンドンの密輸業者ドリスコルが現れる。実の子であるはずのレミに一片の愛情も示さない両親、

レミの兄弟姉妹とされる子供たちや祖父母の粗野な生活ぶり、そして顔立ちにもまったく似たところがないのを見て、同行したマチアはすぐにペテンだと見抜くが、レミは確信がもてずに悩む（後ろで糸を引いていたのは、先述のようにレミをミリガン家の跡継ぎの座から遠ざけようとする、叔父ジェームズである）。結局、一家が起こした教会の盗難事件に巻きこまれ、牢屋に入れられたところでさすがのレミもすべてを悟り、マチアの助けを借りてやっとのことでイギリスを脱出する。

ときに厳しく、ときに優しい大人たちに助けられ、いっぽうで悪意ある大人たちの罠をかいくぐりながら、二つの物語の主人公たちは知的、精神的な成長を遂げていく。そうした試練の間、主人公たちの精神的な支柱となったものは何だろうか。アンドレとジュリヤンにとって、それは亡き父の国フランスに再び帰属したいという強い思いであり、レミにとっては育ての母に再会し、生みの母を探し当てることである。「義務と祖国」の副題を持ち、共和国の真の市民を育てるための教科書とされた『二人の子供のフランス一周』は祖国愛の涵養を重視するが、『家なき子』の旅はより個人的な動機に根差しており、主人公は自らのアイデンティティを「祖国」にではなく広い意味での「家族」に求めた。最後の場面でレミが先祖代々のイギリスの屋敷に招き寄せたゆかりの人々は血縁関係もなく、階級や国籍の壁も超えた多種多様な「複合家族」であり（レミの親友マチアは亡き師匠のヴィタリス同様、イタリア人であり、イギリス人のレミはフランス人のリーズとの間に生まれた息子をマチアと名付ける）、その意味で『家なき子』は偏狭なナショナリズムにとらわれない作品である、という評価がしばしばなされる。[11]

そうした相違はあるにせよ、『家なき子』が今までわれわれが見てきた王政復古期以降の「周遊もの」の系譜の延長上にあることはまちがいない。この二つの物語の中でフランス各地への旅とそこで見聞きする事柄は、主人公

たちの人格形成にどのような影響をもたらしているであろうか。

フランス周遊

先の論文で見た通り、『二人の子供のフランス一周』のアンドレとジュリヤンは、王政復古期以降のフランス周遊ものによく見られたように、フランスの東寄りの地域を起点とし、国土を時計回りに回っている（図版1）。ロレーヌ地方を出てヴォージュ山脈、ジュラ山脈、ついでローヌ川に沿って南下し、途中内陸に入ってブルゴーニュ地方とオーヴェルニュ地方に立ち寄りながら、港町マルセイユまで出る。船で地中海からミディ運河に入り、ボルドーでようやく叔父に再会したあとはもっぱら海路を行く。ブルターニュ沖をぐるりと回り、途中、海難事故に遭いながらもダンケルクに漂着し、その後は運河をたどってピカルディ地方、シャンパーニュ地方経由で故郷のロレーヌ地方

図版1　ブリュノ『二人の子供のフランス一周』の行程

に戻る。南仏のラングドック地方、コルシカ島、南西部のピレネー、アキテーヌ地方、西部のポワトゥ・シャラント地方、ブルターニュ、ノルマンディー地方、そしてとりわけ中部のロワール川沿いについては簡潔に触れられるのみである。その穴を埋めるように、やっとの思いでたどりついた故郷のロレーヌで財産回復のための手続きの必要が生じたため、兄弟は列車でパリに向かい、ついでに立ち寄ったオルレアネ地方で知り合いの農場を手伝うことになって定住を決める、という展開が用意されている。

工藤庸子はこの経路について、やはりこの時期に学校教育の現場で参照されることの多かったミシュレの著作『タブロー・ド・フランス』（*Tableau de la France*, 1833）をふまえつつ、アンドレとジュリヤンが「「新しいフランス」は陸上で、身体を大地に接触させながら、そして「古いフランス」は海上から、いわば距離をおいて把握していくのである」と論じる。[12]「新しいフランス」とはこの場合、主に北東部のロレーヌ地方からフランシュ・コンテ地方、ローヌ川沿岸のリヨンを中心とする地域で、当時工業化が進展しつつあった地域と重なる。「古いフランス」とは先住民族ケルト人の起源の地、ブルターニュを指す。ガロ・ロマン文明が栄えた南仏のラングドック、ミディ・ピレネ地方、アキテーヌ地方も後者に属すると考えてよいが、兄弟は水路（ミディ運河とガロンヌ川）を利用したので、判断が微妙なところではある。先の論文でも触れたように、兄弟が「陸上で」身をもって知ることのできる土地の範囲には限界があり、二人が通らない地方や都市、高速で通過する地方については図版とともに地誌的な情報が挿入されたり、[13]弟のジュリヤンが道中、人から贈られたフランスの偉人の伝記の抜粋へと送り返されたりする。特に手薄な印象を与えるのがブルターニュ以北の北西部、北部とフランス中部で、ブルターニュ地方とロワール川流域についてのページはほぼジュリヤンの偉人伝からの抜粋で埋められている。ノルマンディー地方については操舵手ギヨームの

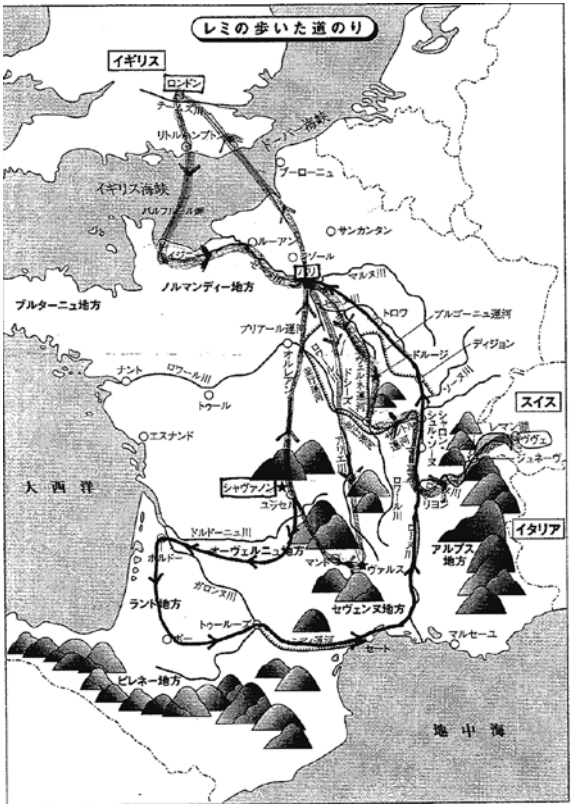
故郷であることから、二人で海上から陸地の方向をあおぎ見ながら、ギヨームがジュリヤンにおもな港町や産業（漁業、紡績業、農牧業）について語り聞かせるというスタイルになっている。ギヨームから、愛する故郷のために汗を流して働くことの大切さを聞いたジュリヤンが、例の偉人伝を取り出してノルマンディー出身のコルネイユ、政治思想家サン・ピエール師、物理学者フレネルについての記述を読み上げたところで、波が激しくなってきて中断を余儀なくされる。[14] 船は難破し、ギヨームの機転によってジュリヤンたちは命を救われるが、ジュリヤンの手元には奇跡的に愛読書が残った。ダンケルクからは故郷のロレーヌ地方までは運河をたどる蒸気船の旅となり、当時、紡績業の先進地域だったフランドル地方、シャンパーニュ地方の産業と歴史については、再びこの偉人伝が参照元となる。[15] もとより教育目的で書かれた本とはいえ、陸から離れる部分では、こうした情報提供の部分が物語をおしのけて全体から遊離しているという印象は否めない。それでも作者はその都度、土地をよく知るガイド役の大人を配し、対話を通してジュリヤンが自然にその土地に興味をかき立てられ、知識を深められるよう、物語構成上の工夫をしている。

『家なき子』の主人公レミの行程はどうであろうか。はじめに述べたように、一八六九年一月の、エッツェルとの連載契約時点での作品の仮題のひとつは『フランスをめぐる子どもたち』（*« Les enfants du tour de France »*）であり、子どもたちがフランス各地をめぐりながら産業や地理・歴史について学んでいく、という教育読本のひとつの型が想定されていた。ここで描かれようとしていたのは、契約書の表現を借りれば「パリの労働者家庭の五人から六人の子どもたちが父親の死によってフランス各地に散り散りとなり、その小さなドラマが繰り広げられる環境の中から、いわばフランスの一覧図、フランスの国民性と産業を示す一覧図が浮かび上がってくる」ような物語である。[16] その半年前にはすでに、エッツェルあての手紙でより詳しいプランが示されている。すなわち、父親の死によってフ

ランスの四方八方に離散した四人の貧しい子供たちが、「一人はセヴェンヌで炭坑夫として、もう一人はサン・カンタンで紡績工として、三番目はモルヴァンで木こりとして、四番目は英仏海峡沿岸で漁師として」働くが、その子どもたちを、そのうちの一人の女の子に思いを寄せる「五番目の子ども」、すなわち「旅暮らしの流しの音楽家」が順次訪ねて歩くことで再び結びつける。[17] いささか図式的ではあるが、これはアキャン家の四人の子どもとレミをめぐる物語の原型であり、一家の離散、そして一家に寄り添う別の子どもが新たなネットワークを構築することで家族の絆が回復される、という構想がなされていたことがわかる。

その後、執筆を進めるマロとエッツェルの間に小説の内容や人物像をめぐって論争が起き（一八七〇年四月）、いったん執筆は中断する。[18] パリ・コミューンをはさんで再び筆を執ったマロは、初稿のうち戦禍をこえて残ったヴァルスの炭鉱事故の場面を除き、ほぼ全面的に作品を書きかえた。[19] そこでは一家離散の物語は小説の後半部に退き、旅芸人の座長ヴィタリスとレミの過酷な道行きが前面に出ている。細部にも変化があり、一家離散の原因は父親の死ではなく家業の破産になっており、四きょうだいの構成は男女二人ずつで、女の子（リーズ）を慕うレミにはマチアという同胞が付き添っている。旅の途中でレミの本当の親がレミを探していることがわかったため、四きょうだいを順繰りに訪ね歩くという計画に変更が生じ、二人が訪れることができたのは結局、アレクシの働くセヴェンヌ地方のヴァルス炭鉱と、末妹のリーズが身を寄せていたはずのモルヴァン地方のドルージだけだった（だがリーズはミリガン夫人に引き取られ、ドルージを去った後だった）。作品冒頭からレミのたどった道のりを見ると（図版2）、育ての親の住むリムーザン地方から、ヴィタリスに連れられてオーヴェルニュ地方、ドルドーニュ地方、ランド地方を経てミディ・ピレネ地方まで南下したあと、セートからローヌ川・ソーヌ川に沿って北上し、コート・ドール丘陵を越え

てパリに至るルートは、かろうじて反時計回りの軌跡を描いている。その後ヴィタリスと死別し、アキャン家での生活と一家離散を経て、朋友マチアとの二人旅に出るのだが、パリから南下した先のセヴェンヌ地方のヴァルス鉱山で九死に一生を得たあと、バルブラン母さんのためにりっぱな雌牛を買い求めて故郷シャヴァノンに帰るところで、いったん彷徨の円環は閉じる。親孝行ができたことで再会の喜びもひとしおだったが、帰還の喜びにひたる間もなく、夫のバルブランの情報を通じてレミを探している実の親がいることがわかったため、二人はパリに舞い戻り、その後はロンドン、ドルージ



図版２　『家なき子』レミがたどった経路

と、ピンポイントでの移動の繰り返しになる。地図の上の軌跡はフランス以西に及ぶことはなく、南北にジグザグの跡を残すばかりである。[20] つまり『家なき子』が典型的な「周遊もの」として、『二人の子どものフランス一周』と似た様相を呈するのは、レミがヴィタリスと行程をともにする前半部に限られている。[21] もちろん、「周遊」のルートを外れたあとのアキャン家での花卉栽培の手伝いやヴァルスの炭鉱での運搬夫としての体験も、レミの全人格的な陶冶に貢献しており、とくに炭坑労働のくだりは当時の児童労働についての社会的視座を含む、非常に重要なシークエンスである。[22] だが、ここではあらためて『家なき子』の該当部分を「周遊もの」の系譜の中に置いて検証してみよう。この苦難と喜びに満ちた道行きこそが、われわれが『家なき子』の物語を想うときに、真っ先に思い浮かべる部分だからだ。[23]

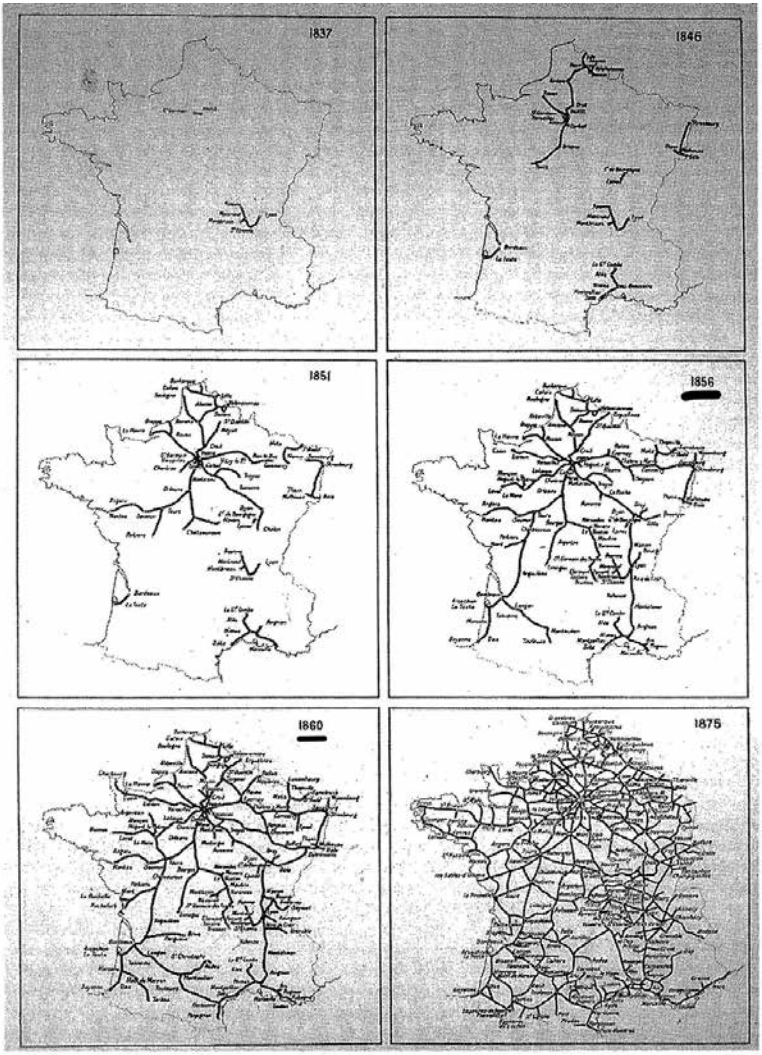
ヴィタリスとレミの踏破したルートを『二人の子供のフランス一周』のテクストと比較して気づくのは、ルートの南北への偏りのほかに、フランス中南部の不毛な高原地帯を重点的に回っているということである。生まれ故郷のシャヴァノン（Chavanon）は架空の町で、二宮フサの注によれば中央山塊の西のはずれ、クルーズ県からコレーズ県に広がる荒野（ランド）（les landes）と呼ばれる不毛な高原地帯に位置するとされ、[24] 本文中にも「フランス中部の最も貧しい村」と書かれている。[25] 十一月の初冬にこの地を発ってオーヴェルニュ地方を南下し、セヴェンヌ地方、ラングドック地方の山岳地帯をまわり、ドルドーニュ川沿いの石灰岩質の高地を経てボルドーへと至る道のりは、八歳の子どもにとっては想像を絶する過酷な旅だったにちがいない。ヴィタリスは町に出ると真っ先に、丘越えにも耐えられるよう、鋲のついた革靴をレミに買い与える。マロの社会問題への深い関心が、その写実的な風景描写や、貧しい地域を選んで描かれている点に表れているという指摘は以前からあったが、[26] 物語の出だしからそうした傾向はすでに顕著

である。

実際、一八二〇年から刊行の始まった、フランス各地の名所、旧跡や美観をとりあげる大型の画文集シリーズ『古きフランスのピトレスクでロマンチックな旅』(*Le voyage pittoresque et romantique dans l'ancienne France*, 1820–1878, 23 vol.)で、ノルマンディー、フランシュ・コンテに続いてオーヴェルニュの巻が出ているが(一八二九—一八三三)、それは人があまり足を踏み入れない辺鄙な地域であったということが大きい[27]。火山、牧草地、森、湖の広がる高原地帯にロマネスク教会や要塞、修道院の跡が点在する雄大な風景は、今日ではユネスコの世界遺産を含む風光明媚な地として多くの観光客をひきつけているが、当時は簡単に足を延ばせるような土地ではなかった。ジュール・マルレ(Jules Marlès)の『アルフレッド、または若き旅行者』(*Alfred ou le jeune voyageur*, 1835)は、十九世紀前半に多く書かれた教育的な「周遊もの」のひとつだが、そこでは十六歳の青年アルフレッドが、アルデーシュ渓谷(セヴェンヌ地方)で白い泡をたてて四〇メートルの高さから流れ落ちる急流の轟音に驚いたり、三、四日をかけてピュイ・ド・ドーム(オーヴェルニュ地方)の火山の頂まで登り、火口の跡や溶岩の跡、高大な緑の平原を見下ろして感動するさまが描かれている[28]。いっぽう、隣接するリムーザン地方については自然の景観に乏しいこともあり、わずかに町の建造物や地場産業への言及があるのみである。レミが俳優としてデビューを飾った町ユッセル(Ussel)については、「ローマの旧道に沿って建てられたらしき人口四千人の小さな町。麻と布、蝋の取引[29]」とあるだけで、レミの記憶に残った「小さな塔のついた古めかしい家々」についての記述はない。リムーザン地方の中心都市リモージュについても、「木造の家が立ち並ぶ町で、見るべき建物としては教会と時計台だけ」、といった簡潔さである[30]。概して「コレーズ県の住民の服装はこの千年変わっておらず、灰色の粗布で仕立てた上着とズボンをはき、

中流階級は栗を常食としている」、「クルーズ県にはいろいろな製造業があるが住人全部を養うには至らず、住民の大部分が他県に移住していく」[31]。こうした記述を読むと、レミもいずれは仕事を求めて故郷を離れる運命にあったのだろうと思わされる。『家なき子』の物語が正確にはいつの時代を舞台にしているかというのは意外に定めにくいのだが、かりに一八五〇年代後半の物語だとすると[32]、リモージュから先のフランス中南部には一八六〇年代になっても鉄道の敷設が進まず、当時の鉄道路線図を見ても、中央山塊のあたりが空白地帯になっている（図版3）。『家なき子』（一八七八）と同時期に出版され、ほぼリアルタイムでフランスを描いた『二人の子供のフランス一周』（一八七七）でもオーヴェルニュ地方のカンタル県の貧しさ（出稼ぎの町）が強調されているので[33]、この時代になっても中南部一帯の状況は大きく変わっていなかったのかもしれない。

バルブラン母さんと別れたばかりの八歳のレミは右も左もわからない、読み書きもできない無力な存在だった。行きかう者としては羊飼いばかりという道中の厳しい自然条件は、幼いレミの精神修養の地としてはうってつけだったろうと思われる。身体もまた鍛えられた。朝から晩まで荒涼たる荒野（ランド）を歩き続けながら、ヴィタリスはレミに動物芝居のこと、これからの道のりのこと、そして木の札を使って文字と音符を、ひとつひとつ、噛んで含めるように教える。新しい町に入れば、町の名前や、川にかかる橋の名前がヴィタリスの口から告げられる。レミは町の景観の記憶とともに、そうした情報のひとつひとつを心に刻んでいく。たとえばケルシーの石灰質高原（コース）（les causses）にあるラ・バスチード・ミュラ（la Bastide-Murat）を通ったときには、この村の名の由来になっているナポレオンの義弟のジョアシャン・ミュラに、ヴィタリスがナポリの宮廷で語り合ったときのことを聞かされる[34]（このときのレミはまだ、ヴィタリスがかつて高名なオペラ歌手であったことを知らない）。ボルドーに入ると一気に視界が開け、豊かな



Les différentes phases du développement ferroviaire français.

図版３　鉄道網の発展

水量をほこるガロンヌ川のむこうにたくさんの屋根や鐘楼、煙突が立ち並び、川には大小の船がひしめいているのが見える。小さな町しか見たことのないレミにとっては、まさに「魔法のような」（féerique）世界だ。ヴィタリスはレミに河口を出入りする船の種類と見分け方を教える。子どもが初めて船を、そして海を見る場面は、児童文学においてはきわめて重要なシーンであり、この場面も例にもれない[35]。

ヴィタリスは言う。「おまえは偶然、普通の子供たちが小学校や中学校に行っている年齢にフランスを歩き回ることになったのだから、目を開いてよく見て、学ぶことだ。もし困ったり、理解できないものを見たり、質問があったりしたら、怖がらずに聞いてくれ。つねに答えることはできないかもしれないが――わしだって何でも知っていると言い張るつもりはないから――でもきっと、時々はおまえの好奇心を満たしてやることはできるだろう[36]。」レミがヴィタリスとともに歩む道の先には、いつも未知の世界が待ち受けている。これはとてつもなく刺激的で実践的な「野外学校」なのだ[37]。

この野外移動教室において大きな比重を占めるのが、地理と歴史である。渡辺貴規子はマロが『家なき子』を執筆中、初等教育の世俗化と無償義務化を定めたジュール・フェリー法の施行（一八八一―一八八二）に先立って議会に提出されていた一連の初等教育改革法案（一八七七）を読んでいて、第三共和制初期に行われる教育改革の内容を小説の中で先取りしていた可能性を指摘する[38]。法案に含まれていた教科教育の内容と、『家なき子』の中で展開される教育の内容に多くの共通点があるからで、たとえば一八七七年のバロデ案で規定されている以下の科目の内容が、小説内に認められる（かっこ内にレミの受けた教育内容を示す）。「読み方・書き方」（ヴィタリスに文字と読書を教わる）、「計算」（雌牛の値段の交渉）、「フランスの地理歴史」（歴史：ナポリ王ミュラ、ミディ運河、炭鉱町ヴァルスの

歴史、地理：陸路・水路両面にわたるレミの旅、通過する町の景観や歴史的建造物）、「自然科学」（動植物についての知識、炭鉱の起源としての地殻変動・化石植物、炭鉱内の気圧と水圧）、「体育」（身体の鍛錬）、「図画と音楽」（リーズに絵を教える、レミの歌唱、マチアの楽器演奏）、「法律の知識」（ヴィタリスの公務執行妨害、イギリスでのレミの窃盗罪の裁判）、「外国語」（英語）、「産業に関する実践的知識・職業教育」（役者、園芸、炭鉱労働）など。渡辺によればこれらの項目のうち、マロがとくに重視していた要素のひとつが地理教育で、すでに見たように、そもそもエッツェルからの連載依頼の趣旨が、子どもたちがフランス各地をめぐりながら産業や地理・歴史について学んでいくというものだったからだ。地誌学（歴史も含めた地域の特色の記述）、あるいは現代の用語を使うなら、自然地理学よりも人文地理学に近いものだ。それは本で知識を得ることの重要さを説くために、ヴィタリスがレミに与える「本」の内容と一致している。

> [[…] こんど休憩するときに見せてあげよう。本にはわれわれが通る土地の地名や歴史が書かれている。その地に住んだ人たちや通った人たちが、見たことや知ったことをわしの本の中にもりこんだのだ。だからこの本を開いて読むだけで、そうした土地のことがわかる。まるで自分の目で眺めるように目に浮かぶし、語り聞かせてもらうように話がわかるのだ。[39]」

今いる町は地図上のどこなのか、それはどんな土地で、どんなふうにできた町なのか、どういう人たちが住んでいて、どんな産業が町を支えているのか。実際、ヴィタリス一座にとって、よい観客のいる地区を見極め、興行の実入

りをできるだけ多くするという実利的な意味でも、その土地をよく知っておくことは重要だ。『フランスを旅する子どもたち』のジュリヤンのあの座右の書、フランス各地の紹介に偉人伝を合わせたような教本がすぐに思い浮かぶが、ここでヴィタリスが言っているのは、十九世紀前半のフランスで流通していた勃興期のガイドブックのようなものだろうか。[40] ただガイドブックよりは見聞記的な要素が強い気もするので、旅日記の体裁をとったエティエンヌ・ド・ジュイ（Étienne de Jouy）の「地方の隠者」（*L'Hermite en province*）シリーズの類かもしれない。[41] これだと地方別の分冊になっているので、何巻にもわたって持ち歩くことになるが。

ヴィタリスがレミとともにこの本を読む場面は描かれていないし、その本からの明らかな引用も本文中にはない。[42] 字を読めるようになったレミが一人でこの本のページを繰ってその土地についての知識を蓄えている様子もない。芝居のレパートリーが限られている都合上、同じ町に長く滞在することを許されない、極端にせわしい旅だったからだろうか。レミ自身が印象に残っていない町については語らないのは確かだ。[43] ただ、それにしても「ぼくたちはすでにオーヴェルニュ、ヴレー、ヴィヴァレ、ケルシー、ルーエルグ、セヴェンヌ、ラングドックなど、フランス南部の一部をまわってきた」[44] とさらりと書いてあるわりには、ユッセルからラ・バスチード・ミュラ（ケルシー地方）までのルートについての記述が一切ないのは妙である。実は、一八七〇年四月にいったん書き上げられた初稿にはオーリヤックのあと、サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼路にあるカオール（Cahors）、断崖の地層で有名なボール・レ・ゾルグ（Bort-les-Orgues）、黒い聖母で知られる巡礼地ロカマドゥール（Rocamadour）への言及があったことを、パトリック・カバネルが明らかにしている。[45] マロはエッツェルの意向にしたがって、フランス各地についての教科書的な記述を多く入れたものの、マロの伝記の著者アニェス・トマ・マルヴィルの表現を借りれば「地理、

歴史に関する煩わしい記載」で埋め尽くされた「正真正銘の観光パンフレット」を書いてしまったことに嫌悪感を抱き、最終的に削除したものと思われる。[46] こうしたマロの姿勢には、なによりも読者に「共和国の市民」にふさわしい知識を授けることを目指したフイエ夫人（G. ブリュノ）とは異なる方向性を見ることができよう。マロは読者に教科書的な知識を与えることよりも、土地の風物や景観が感受性豊かな主人公の心に刻まれるさまを伝えることに重きを置いている。

地図と時計と書物と

知識を与えつつ知識偏重ではない教育を目指すというのは、現代にも通じる難題である。『家なき子』の出た時代には、ジュール・フェリーの初等教育改革を前に地理教育も大きな転換点を迎えていた。比較的早くから初等教育に組み込まれていた歴史とは異なり、地理は一八七〇年代までせいぜい選択科目でしかなく、歴史に対しても従属的な地位に置かれていた。フランス人は地理を知らない、地図が読めない、とヨーロッパの他の国々から揶揄されていたほどだ。[47] いっぽう、オズーフ夫妻によれば、『二人の子供のフランス一周』の弟ジュリヤンが小学校に入る普仏戦争直後の時期には、「地図を読めないのは恥であり不幸だ」と見なされ、教室の壁には地図がかけられ始めていたという。[48]『二人の子供の…』には二〇〇枚を超す図版と地図が挿入されており、地図の大部分はジュリヤンの愛読書である偉人の伝記に挿入されている設定であると考えられる。すでに初等教育を終えている兄のアンドレは地図の読み方を知っていて、森林監視員のフリッツの地図を書き写し、その情報をもとに自力で夜の森を抜けてフランス領に達す

る。[49] いっぽう、レミは村の小学校に少し通ったが、ろくに読み方も算数も教えてもらえなかった。[50] それでも師匠のヴィタリスから字を習い、本を読むうちに、地図も読めるようになったのだろう、ミリガン夫人とセートで別れたあとに、リヨンのほうぼうの古本屋でフランスの地図を調べ、この先どこかの川や運河で白鳥号と再会する可能性がないかどうかを調べた、とある。[51] そしてヴィタリスを失ったあと、アキャン氏の逮捕と一家離散という悲しい現実をのりこえて、犬のカピを連れて再びあてどない旅に乗り出したレミが最初に手に入れたのが、セーヌ川の川岸の古本屋で売っている黄ばんだ、折りたたみ式のフランスの地図だった。[52] 最終的にレミがスイスのヴヴェでミリガン親子に合流できたのは、ノルマンディー地方のイジニーで買いなおしたフランスの地図と（もとの地図はリュックに入れたままロンドンに置き去りになってしまった）[53]、道中で集めた白鳥号の目撃情報のおかげである。

そしてもうひとつ、パリを離れようとするレミのズボンのポケットには、アキャン氏の餞別の銀時計が入っていた。時計はカピと芝居をするための商売道具であり、レミの話し相手であり、[54] そして「自分が自分自身の主人」[55]であることの証である。師のヴィタリスも、かつての名声をしのばせる大きな銀時計を持っていたが、貯金が底をついたときに売り払わざるをえなくなった。もはや数日間雪に降りこめられても、今が昼なのか夜なのか確かめるすべもない。時間を管理し、生活を統御する手段を失ったことが、やがてヴィタリスの死につながったと言っても過言ではないだろう。実は、レミがアキャン氏から受け取った銀時計は調子が悪く、出発のときにチュイルリー宮殿の大時計の指す時間と比べると三十分の誤差があった。ただレミは、これから自分が歩む先ではこの銀時計の時間が正しい時間なのだと心に決める。[56] この場面はレミの精神的な自立の瞬間を鮮やかに印象づける。

渡辺貴規子は、『家なき子』は「独学者」の小説であるという。[57] 学校教育を受けず、自らの意志で教養を積み、粘

り強い努力を続けて自分を高めてきた大人たちのもとで、レミは多くのことを学ぶ。彼の庇護者となった大人たちのうち、個別の教育を受けていた可能性のあるミリガン夫人を除いては、みながこのカテゴリーに属する（ヴィタリス、アキャン氏、ヴァルスの老運搬夫〈先生（マジステール）〉）。『二人の子供の…』においてもこの傾向はあり、二人の兄弟が世話になるのは農家、職人、行商人、水夫など、職人階級の大人たちである（ここでも、もと教師のジェルトリュド夫人だけは教育を受けた人であるかもしれない）。渡辺は、マロが共和国で始まろうとしていた初等教育改革に強い関心を寄せながらも、いっぽうで学校教育に対する不信感を抱いていたことを指摘したうえで、そのあらわれとして『家なき子』では、学校で教育される子供にありがちな、与えられた知識をうのみにするような受け身の態度が批判されており、逆に学校外での体験によって子供の好奇心や心身の自然な発達を促し、生きる力をつけさせる、「独学者」による教育のあり方が称揚されていることを強調する[58]。共和国の教育改革が進めば、近々こうした「独学者」たちもフランスからはいなくなるだろう。実際、レミよりも少し下の世代のアンドレとジュリヤンになると事情は異なってくる。おそらくは教育を重視していた父親の方針によって、まだ義務化されていなかった初等教育の課程を修了していたアンドレも、就学年齢に達していたジュリヤンも、学校が大好きな子供たちである。アンドレはジェルトリュド夫人の家に寄留していた折、錠前職人の修行のかたわら、夫人のすすめにしたがって職人向けの夜間無料講座に通う。ファルスブールを出るときにランドセルやノート、筆記用具を忘れずに持ってきたジュリヤンは、エピナルで小学校に通い、学校からお話の本を借りてきて、夜、ジェルトリュド夫人に読み聞かせる[59]。ジュリヤンはその後移動生活が続き、学校に戻る機会はなかったようだが、偉人伝を片手に独学を続け、成長してオルレアネ地方の農夫となったあとも、かつて行商人ジェルタル氏と雌鶏を買いつけたブルゴーニュの農家で得た衛生管理の知識が、今でも

役立っていると語っている。[60] 共和国の精神の涵養という色彩が強いと言われる『二人の子供のフランス一周』においては、来るべき新しい時代の学校教育のメリットと、古きフランスの独学者—周遊者でもある—の伝統とがほどよく取りこまれていると言えるだろう。[61]

『家なき子』の「独学者」のヴィタリス、アキャン氏がともにレミに与えたものに、時計のほか、書物がある。ヴィタリスがレミに見せたフランス各地の地理・歴史や人々の暮らしが書かれた本と、アキャン氏の蔵書にあった植物学・植物誌の本と旅行記、そしてアキャン氏がパリでたまたま目にして買ってきてくれた雑多な本[62]とではジャンルも傾向も異なるが、それらの本の「よいところは自分のなかに残り」[63]、糧となった。読書は実体験に代わることはできないが、実体験を補い、支えることができる。『家なき子』の物語の中には、レミが書物から得た知識を実地に生かす場面は見当たらないが、かわりにヴィタリスがおそらくは本に基づく知識をもとに、レミに現実世界の読み取りかたを教える場面がある。

ボルドーから南下して、アドゥール川右岸のランド地方（Landes）を訪れたときのことである。「荒地（lande）」を表すその名のとおり、エニシダとヒースくらいしか生えないわびしい砂地の平原で、いくら先に進んでも進んだという実感がない。ときどき松林に出会うが、これは水はけの悪さを解消するために人工的に植えられたもので、当時は松脂の採取が行われていた。[64] 夕闇のもやが迫ると目の前に曲がった幹や枝が「幻想の世界に属する生き物」のように黒く、不気味に浮き上がる。そして夜の静寂の中、巨大な鳥なのかクモなのか、異様に足の長い黒いものがこちらに向かってやってくるのを見て、レミは「けもの、けもの！」と叫びながら逃げ惑う。その姿を見てヴィタリスは「お前こそけもの（bête）だな」と笑い転げる。[65] それは「幽霊」（une apparition）ではなく、「一メートル半か二メー

トル近くもある長い細い二本の脚」で立っている人間で、人間の言葉を話していた。ヴィタリスはそれが竹馬（des échasses）に乗った人たちであることを教える。

それから彼はランド地方の人たちが、砂地の土地やぬかるんだ土地を通るのに腰までつかってしまうことのないよう、二本の長い棒に足場をつけ、そこに両足をしばりつけて操るのだと説明してくれた。「こうやって、臆病な子供からみるとあの人たちは七里の大靴をはいた巨人になるんだよ。[66]」

ヴィタリスはここで思いこみや偏見にとらわれず、自分の頭で考えて動くことの大切さをレミに教えている。ただ、それには知識が必要だ。ヴィタリスはおそらく持っていた本を通じて、ランド地方の庶民の風習を知っていたと思われる。[67] パトリック・カバネルはこの箇所に、『家なき子』以前に書かれた「周遊もの」におけるランド地方の表象が反映されていると考える。[68] 実際、「周遊もの」に限らず、当時の旅行記や旅行ガイドの類には必ずと言っていいほどランド地方の牧人への言及があり、しばしば図版が添えられていた。たとえばコンスタン・タイヤール（Constant Taillard）ほか著の『若き旅行者たち、または散文と韻文によるフランスについての手紙』（*Les jeunes voyageurs ou Lettres sur la France en prose et en vers*, 1821）の「ランド地方」の章の扉絵（vignette）には、イヌイットの民のようないでたちの男性が竹馬に乗ったまま、読者のほうをのぞき込むような姿が描かれている（図版4）。主人公の青年アルフォンスはここで一・五メートルを超す高さの竹馬に乗って水路や小川を猛スピードで越えていく住人に遭遇し、事前にそうした人々の存在を地理の本で読んでいたにもかかわらず、恐怖を覚えたとある。[69] その翌年に出た

フレッセル夫人（*comtesse de Flesselles*）の『フランスを旅する若者たち』(*Les jeunes voyageurs en France, 1822*) のランド地方の記述はほぼタイヤールのテクストの焼き直しだが、ここでも主人公の青年ヴィクトールの目に映る住人たちは、遠くからは「ドン・キホーテが勇猛果敢に倒そうとした風車の羽を思わせる巨人」に、近づくと「人間の姿はしているが手足が複数あるように」見えた、と書かれている。[70] こちらの図版で描かれる牧人は、まるで道化師か芝居の端役のような珍奇ないでたちである（図版5）。「巨人」のイメージは当時流通していた一般的なイメージであったと思われ、けもの（une bête）なのか人間（un homme）なのかわからないこの不思議な生物について、「この地方には巨人族（géants）がいるんですか」[71] とヴィタリスに尋ねるレミの反応も、ごく標準的なものだったろう。

こうした各地のピトレスクな風俗習慣に対する民

図版4　コンスタン・タイヤールほか『若き旅行者たち』第6巻扉絵

図版5　フレッセル夫人『フランスを旅する若者たち』第2巻

俗学的ともいえる興味の寄せ方は、王政復古期から七月王政期にかけて書かれた「周遊もの」や百科事典的なガイド類に共通する特徴であった[72]。マロがこの場面を書くために、具体的にそうした書物を参照したかどうかはわからないが、少なくとも世間に流通していたイメージをもとにしているのはまちがいないし、こうした細部を「地理、歴史に関する煩わしい記載」に類するものとして退けることもしなかった[73]。教育的な観点からいえば、先入観や偏見にとらわれずに対象をよく「見る」ことの大切さを教えるという意味で重要な場面だが、創作上の観点からは幻想小説的な面白さがあると同時に[74]、レミの未熟さ、幼さをヴィタリスが大笑いしながらからかうという、小説内でもまれな、息抜き的な場面ということもあるのだろう。

終わりに

人生の先達から世の中を読み解くための地図、時計、書物を与えられたレミは、それを用いて自分の力で生きていくためのすべを身につけた。彼がヴィタリスやマチアと歩いた道のりは、先行する「周遊もの」や『二人の子供のフランス一周』に比べれば、きれいな円環を描いてもいないし、網羅的でもない。また、『二人の子供の…』のように学校教育の現場で用いられる読本として書かれたわけでもないので、主人公たちが道中で得た知識を（文字や図版、地図を通じて）読者と共有する、という形態もとってない。アンドレとジュリヤンにとっては、旅は祖国フランスにふさわしい市民となるための修練の機会であったが、レミにはそうした義務の観念はない。ただ、それでも立ち寄った町や村の景観や歴史に触れ、その土地の習俗を学ぶことで視野を広げ、見識を深めていくレミの姿勢には、かつて

フランスをめぐった商人や職人の子供たち、貴族やブルジョワの子弟たちの旅の伝統が、たしかに息づいている。

レミの場合、受け取った知識や技術を（作品の外を含めた）外部に向かって誇示する必要はないので、それをむしろ身近な人たちに伝えようとする。アーサーには物語の暗唱のしかたを、アキャン氏の末娘リーズには文字とデッサンを、マチアには文字と音楽の基礎を、というふうに。知識を授けられた子供がこんどは先生となって別の子どもに教えるという様式には、かつて王政復古期のフランスで行われていた「相互教育」の名残を見ることもできようが、いっぽうでそうした伝授の試みが血縁も国籍も超えた連帯の輪をつくり、小説の末尾でレミが披露する「大きな家族」へとつながった、とも考えられないだろうか。

二〇一八年のフランス映画「家なき子―希望の歌声」の最後では、イギリスに戻ったレミが歌手としての活動を終えたあと、妻のリーズとともに孤児院を開き、子供たちにヴィタリスとの思い出を語り聞かせている場面が描かれる[79]。この場面は貴族による慈善事業の典型的な一例として、いかにも紋切り型の物語展開と受けとられそうだが、こうした結末はかつて自分の得た知識と経験を人に伝えることに喜びを見出していた、少年時代のレミにふさわしい。移動と休息を繰り返す生活の中でひたすら自分と世界とを見つめ続けた日々のことを、今は土地に根をおろして、次の世代に語る日がきたのである。

【図版出典一覧】

図版1　G. Bruno, *Le Tour de la France par deux enfants*, Belin, 1994, p.318.
図版2　以下の地図をもとに著者が作成。

エクトール・マロ、二宮フサ訳『家なき子』、偕成社文庫、一九九七、下巻、口絵の地図

図版3　François Caron, *Histoire des chemins de fer en France*, t.1, 1740-1883, Fayard, 1997.

図版4　L.N.A.*** et C.T. *** (Constant Taillard), *Les jeunes voyageurs ou Lettres sur la France en prose et en vers*, Lelong, 1821, t.6.（扉挿絵）

図版5　Mme de Flesselles, *Les jeunes voyageurs en France*, P. Blanchard, 1822, t.2.

注

（1）　あるいは、主人公の苗字をとって『○○家の人々』（*La famille XXX*）となる予定であったという（Patrick Cabannel, *Le tour de la nation par des enfants. Romans scolaires et espaces nationaux (XIXe-XXe siècles)*, Belin, 2007, p.268）。前回の論文と同様、十九世紀から二十世紀にかけての「フランス周遊もの」の系譜と派生を追ったこの研究書については多くを寄っている。

（2）　拙論「フランスを旅する子どもたち（一）王政復古期の「周遊もの」からG. ブリュノ『二人の子供のフランス一周』まで――」、『明学佛文論叢』第五〇号、二〇一六、八三―一二一頁。この論文の発表後に、『家なき子』の成立の過程、第三共和政初期における教育改革の理念との関連、さらに社会的貧困や児童福祉をめぐる当時の議論を受けてのマロの社会批判について、実証的に、網羅的に論じた渡辺貴規子氏の博士論文が出版された（『『家なき子』の原典と初期邦訳の文化社会史的研究――エクトール・マロ、五来素川、菊池幽芳をめぐって――』、風間書房、二〇一八。後半では邦訳の受容の問題を扱っている）。当時の道徳教育や歴史教育、労働問題、社会福祉制度についての内外の研究を渉猟し、初等教育法案、民法の条項にも目を通して『家なき子』の文化的・社会的背景の解明を試みた浩瀚な研究であり、本論文でも大いに参考にしている。

（3）　『海底二万里』執筆前夜のヴェルヌは一八六七年から丸一年を費やして、『教育と娯楽誌』に『図解フランス地理』（*Géographie illustrée de la France*, 1867-1868）を連載した（石橋正孝『〈驚異の旅〉または出版をめぐる冒険――ジュール・ヴェルヌとピエール＝ジュール・エッツェル』、左右社、一二四―一二五頁）。

（4）　『家なき子』には、こうして『シエークル』誌での連載直後にダンテュ社から出版された単行本（ダンテュ版）と、その

後エッツェルの介入によって一部が改変・削除されたあと、エッツェル社から出た挿絵入りの版（エッツェル版）の二種類の版がある（渡辺貴規子、前掲書、三〇―三二頁、および二宮フサ訳『家なき子』、偕成社文庫、一九九七、下巻、「解説」四一三―四一四頁）。この論文ではエッツェル版を踏襲していると思われるロベール・ラフォン社のテクストを使用した。Hector Malot, *Sans Famille*, in *Des Enfants sur les routes*, éd. présentée et établie par Francis Lacassin, Robert Laffont, 1994, p.167-568.

（5） たとえば石津小枝子・高岡厚子・竹田順子・中川亜沙美共著『フランスの子どもの絵本史』、大阪大学出版会、二〇〇九、一一八―一二三頁。パトリック・カバネルは、マロの作品中にはフイエ夫人の著作への言及がまったくないことから、マロが『二人の子供の…』を読んでいた可能性は低く、あるいは知っていたとしても、自分の作品は「小説」であって「小説風の教科書」とはジャンルが異なると考えていたと指摘する（Patrick Cabannel, *op.cit.*, p.271）。

（6） Patrick Cabannel, *ibid.*, p.293.

（7） *Ibid.*, p.321-330.

（8） 『家なき子』はレミの一人称の語りで構成されており、小説冒頭の一文は「ぼくは拾われた子だ」（Je suis un enfant trouvé.）である。

（9） G. Bruno (pseudonyme d'Augustine Fouillée), *Le Tour de la France par deux enfants*, Belin, 1994, p.297.

（10） マロはディケンズ（一八一二―一八七〇）の翻訳がフランスで人気を博しているころに小説を書き始め、ロンドン滞在の経験をもとにした評論『現代イギリスの生活』（*La Vie moderne en Angleterre*, 1862）でもディケンズを高く評価している。ともに社会批評的な要素を多く含む風俗小説の書き手として共通点も多い。マロのディケンズ受容については以下の論文を参照。Anne-Marie Cojez, « Hector Malot et l'écriture dickensienne », *Perrine*, Revue en ligne de l'Association des amis d'Hector Malot, 2015, p.1-8 (https://www.amis-hectormalot.fr/revue-perrine/revue-perrine-2015).

（11） 末松氷海子『フランス児童文学への招待』、西村書店、一九九七、八四 - 八五頁。渡辺貴規子は『家なき子』を普仏戦争敗北後の愛国主義の流れの中に位置づける見解に疑義を呈し、物語中では「家族」が「神」や「祖国」にかわる精神的な支柱、道徳的な規範のよりどころとして機能していると指摘する。しかもそれは愛情と友愛に基づく対等な結びつきを前提とする家族のあり方であり、子が親に対して尽くすべき義務や服従の姿勢を重視するブリュノの家族観とは異なる（前掲書、

九〇―一〇七頁）。

（12）工藤庸子『ヨーロッパ文明批判序説――植民地、共和国、オリエンタリズム』、東京大学出版会、二〇〇三、一六九―一七〇頁。ミシュレの『タブロー・ド・ラ・フランス』（フランス地理概観）はもともと古代から一三〇〇年頃までを扱った『フランス史』第二巻（一八三三）の冒頭に置かれた独立した章であった。

（13）アンドレとジュリヤンの主な交通手段は徒歩、馬車、船だが、ジュリヤンが馬車の事故で負傷したために、一か所だけ鉄道を利用する場面がある（ヴァランス―マルセイユ間）。

（14）G. Bruno, *op.cit.*, p.237-245.

（15）*Ibid.*, p.258-269.

（16）Patrick Cabannel, op.cit., p.268.

（17）*Ibid.* 渡辺貴規子、前掲書、二〇―二九頁も参照。

（18）エッツェルがマロの書いた初稿（第一巻分）に異議を唱えた理由は、そこに描かれていた情景が「あまりに暗く、あまりに残酷」だから、和らげてほしい、というものだった。具体的には養父バルブランの粗暴さと、イタリア人親方（ガロフォリ）の児童虐待の場面を指す。読者である子どもたちに恐怖感や不安を与えるような要素は避け、社会問題や宗教問題に触れる部分は慎重に回避すべきというのが、エッツェルの立場であった。マロは激しく反発し、連載の計画はいったん頓挫するが、一八七七年から一七七八年にかけての改稿時には、さすがのマロも好き勝手に書くことはせず、児童文学の枠内で、子どもに理解できる範囲のことを、その親たちにあきれられることのないように書いた、と自ら述べている（Hector Malot, *Le Roman de mes romans*, Flammarion, 1896, p.129, p.133. https://archive.org/details/leromandemesroma00malouoft, Internet Archives, coll. Royal Ontario Museum Library）。

（19）この初稿はパリ・コミューンの混乱の中で大半が失われたと思われてきたが、実は残っており、フランス国立図書館のコレクションに収められている。

（20）いっぽう、レミの行程を補うかのように、河川と水路網をたどってフランスをぐるりと反時計回りにまわるのが、ミリガン夫人と息子のアーサーが乗る白鳥号である。アーサーの健康回復のために特別に作られたこの屋形船は、ボルドーからフランスに入り、ガロンヌ川をさかのぼり、ミディ運河を経ていったん地中海に出たあと、こんどはローヌ川を北上し、運河

でつながれたソーヌ川、ロワール川を経てセーヌ川に入る。本来はそこからパリ、ルーアンを通ってイギリス海峡に出るはずであったが、アーサーの健康状態を慮ってのことか、再びヨンヌ川から運河沿いに南下し（ニヴェルネ運河、並行運河、サントル運河）、リーズを引き取りつつ、再びローヌ川をさかのぼり、セセルで船を下りて、そこからは馬車でスイスのレマン湖畔にあるヴヴェへと向かう。そこで船のあとを追ってきたレミとの再会を果たす。船頭や家政婦を同行させているとはいえ、病身の子どもを連れての、川の遡行を複数回含む過酷な船旅であり（白鳥号には動力がついていない）、夫人の勇気と覚悟をうかがい知ることができる。小倉孝誠は、フランスの四大河川すべてを通過するこのミリガン親子の船旅が、稠密に張りめぐらされた水路網を活用してフランス国内を横断あるいは縦断が可能であったことを証明するものだと評価している（『パリとセーヌ川――橋と水辺の物語――』、中公新書、二〇〇八、六三―六四頁）。

（21）使用した版では全四十二章のうち第十八章まで。

（22）架空の炭鉱町ヴァルスの描写に際し、マロがゾラの『ジェルミナール』（一八八五）でも参照されることになる次の著作を活用したことはよく知られている。ルイ・シモナン『地下の生活』（Louis Simonin, *La Vie souterraine*, 1867）。ここには炭鉱町の様子や炭鉱夫とその家族の生活、坑内のしくみ、出水事故についての記述がある。

（23）たとえば原作の精神を忠実に受け継いだ二〇一八年のフランス映画「家なき子――希望の歌声」（アントワーヌ・ブロシエ監督）では、ヴィタリス（伝説的なヴァイオリン奏者となっている）の役割が大幅に拡大されている。ヴィタリスはレミの親探しのためにロンドンまで付き添い、ドリスコル一家の陰謀にも雄々しく立ち向かい、あと一歩というところで吹雪の中で力尽きる。

（24）前掲書、上巻「訳注」三四七頁。

（25）*Sans Famille*, éd.cit., p. 167. ファビエンヌ・ガルヌランの論考によれば、マロはクルーズ県からコレーズ県にかけてのこの地域に足を運んだことはなく、おもに伝聞や書物（地理の本）によって情報を集めたと考えられる。地勢についてはそうでもないが植生の記述は正確であり、その地域の風俗や雰囲気をよくとらえている（バルブランの夫は石工でパリに出稼ぎに出ていたが、実際にこの地方は石工を多く出していた）。Fabienne Garnerin, « Bâtir l'espace, à partir de quelles sources ? Les cas de Chavanon et Ussel, dans *Sans Famille* », *Perrine*, revue en ligne de l'Association des Amis d'Hector Malot, 2017, p.1-13（https://www.amis-hectormalot.fr/revue-perrine/revue-perrine-2017).

(26) 渡辺貴規子、前掲書、一七七頁。

(27) シャルル・ノディエ、テロール男爵、アルフォンス・ド・カイユーによって企画され、当時としてはまだ新しい技術であった石版画を用いてフランス各地の景観や名所を紹介する豪華本シリーズで、多くの寄稿者や画家を集めて半世紀にわたって続いたが完結はしなかった。このシリーズについては以下の文献を参照のこと。Jean Adhémar, *La France pittoresque : les lithographies de paysage au XIXe siècle*, Somology Éditions d'Art, 1997. 石木隆治「テロール男爵の『古(いにしえ)のフランス、ピトレスク・ロマンティック紀行』」、『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ』第五七号、二〇〇六、六九―一〇一頁。

(28) Jules Marlès, *Alfred ou le jeune voyageur*, Didier, 1835, p.257, p.300-301

(29) *Ibid.*, p.303.

(30) *Ibid.*, p.304-306.

(31) *Ibid.*, p.304, p.307.

(32) 研究者のひとりギユメット・ティゾンは、ヴィタリスがレミにジョアシャン・ミュラに会った過去を語ったエピソードをもとに、この物語の設定を十九世紀前半であると推定している（渡辺貴規子、前掲書、二四六頁、注七二）。これに対して我々はより時代を限定し、トゥールーズの監獄を出たヴィタリスに、ミリガン夫人が旅費を送ってセート（Sète）まで鉄道で来るように頼んだ一節をもとに、この場面がボルドー―セート間に鉄道の開通した一八五七年四月二十二日以降の出来事であると推定する（cf. François Caron, *Histoire des chemins de fer en France*, t.1, 1740-1883, Fayard, 1997, p.223-224）。このときレミは九才になろうとしていたと考えられるので、レミは一八四〇年代の終わりの生まれであり、小説の末尾でミリガン・パークの主となったレミが三〇代に近づこうとしていたと仮定すれば（小説は一八七八年の出版）、物語はほぼリアルタイムで進行していたということになる。

(33) G. Bruno, *op.cit.*, p.124.

(34) *Sans Famille*, éd.cit., p.215-216.

(35) *Ibid.*, p.217. 『二人の子供のフランス一周』では、兄弟は叔父のフランツの行方を追ってたどり着いたマルセイユで初めて海を見て感激する。世界の各地から集まった無数の船が色とりどりの旗をはためかせながら港にひしめいている光景を見た翌日、二人は許可をもらって停泊中の巨大な蒸気船の内部を見学する（G. Bruno, *op.cit.*, p.181-187）。ここには「フラン

ス第一の港」マルセイユの港の遠景、大型蒸気船の外観、乗客室、船員室の図版に加え、荷を運び込む船員たちがさまざまな肌の色をしていることにかこつけて、「四つの人種」（白人、黄色人種、赤色人種、黒人）について解説する図版も添えられており、とりわけ教養主義的な色彩を帯びている。

（36）*Sans Famille*, éd.cit., p.214.

（37）オズーフ夫妻が『二人の子供のフランス一周』の、アンドレとジュリヤンの旅を評して用いた表現。ジャック・オズーフ、モナ・オズーフ、平野千果子訳「『二人の子供のフランス巡歴』共和国の小さな赤い本」、ピエール・ノラ編、谷川稔監訳『場の記憶――フランス国民意識の文化＝社会史』、第二巻〈統合〉所収、二〇〇三、岩波書店、二六六頁。

（38）渡辺貴規子、前掲書、第一部第二章（四二―七八頁）。

（39）*Sans Famille*, éd.cit., p.208.

（40）拙論「フランスを旅する子どもたち（一）王政復古期の「周遊もの」からG．ブリュノ『二人の子供のフランス一周』まで――」、一〇〇―一一〇頁。

（41）*L'Hermite en province, ou observations sur les mœurs et les usages français au commencement du XIXe siècle*, 1817-1827, 14 vols. 主人公の「隠者」がアルザス地方やノルマンディー地方などを経巡り、各地の名士を訪ねつつ、土地の歴史、産業、偉人などについてルポルタージュするというもの。ジュイは各地にいる通信員から情報を得ていたとされる。

（42）ただしパトリック・カバネルは、ラ・バスチード・ミュラの村に入る手前のところで書かれたケルシーの石灰質高原（les causses）についての説明文（「未開の土地とやせた低木ばかりが広がっている、でこぼこに波打った広大な平地」, p.215）の中で、« les causses » の単語がイタリックになっていることに注目し、ここでヴィタリスの本が参照されている可能性を示唆している（Patrick Cabannel. *op.cit., p.272*）。

（43）*Sans Famille*, éd.cit., p.216.「堀と洞窟と塔のある廃墟の町」サン・テミリオンの町の景観を三行で述べたあと、そのあとに訪れたボルドーの強烈な印象に比べて、町の記憶が曖昧であることを告白している。

（44）*Ibid.*, p.213.

（45）Patrick Cabannel. *op.cit.*, p.269-270.

（46）*Ibid.*, p.269. 渡辺貴規子、前掲書、五九頁も参照。

(47) P. Giolitto, *Histoire de l'enseignement primaire au XIXe siècle*, t.2 (Les méthodes d'enseignement), Nathan, 1984, p.194-197.

(48) ジャック・オズーフ、モナ・オズーフ、前掲論文、二六八頁。『二人の子供の…』の物語が始まる一八七一年九月に、兄アンドレは一四歳、弟ジュリヤンは七歳とある。当時の小学校は初級課程が七歳から九歳、中級課程が九歳から一一歳、上級課程が一二才から一三才であったので、一四歳のアンドレは初等教育を終えて職業訓練に入り、七歳のジュリヤンは就学年齢に達したところということになる。

(49) G. Bruno, *op.cit.*, p.17-25.

(50) レミ自身が第七章でこぼしているように、十九世紀前半にはまだ初等教育は発展途上の段階にあり、教師たちも専門教育を受けた専任の有資格者ではなかった。せっかく学校ができても、農作業の手伝いなどのために子供の就学率は低かった。一八六三年の調査では、九歳から一三歳の子どもの四分の一がまったく学校に行っておらず、残りの三分の一も、年の半分程度しか通学していなかったという（マーティン・ライオンズ「十九世紀の新たな読者たち――女性、子供、労働者――」、ロジェ・シャルティエ、グリエルモ・カヴァッロ編、田村毅ほか共訳、『読むことの歴史』所収、大修館書店、四六二―四六三頁）。

(51) *Sans Famille*, éd.cit., p.267.

(52) *Ibid.*, p.352.

(53) *Ibid.*, p.543.

(54) *Ibid.*, p.351

(55) *Ibid.*, p.347.

(56) *Ibid.*, p.352.

(57) 渡辺貴規子、前掲書、一五七―一七六頁。

(58) 同書、一七三―一七六頁。

(59) G. Bruno, *op.cit.*, p.41, p.43-44.

(60) *Ibid.*, p.303.

（61）ただしオズーフ夫妻は『二人の子供のフランス一周』は実際のところ、農村を中心とするフランス社会を念頭に置いているとして、たとえば学校での成績のよいジュリヤンですら、一八七七年の時点では農業以外の職につくことを考えていなかった点を重視する。いっぽう、一九〇六年に加えられた「エピローグ」の部分には行商人ジェルタルの息子がパストゥール研究所の研究員として登場し、フイエ夫人が一八八七年に書いた小説『マルセルの子供たち』では、優秀な子供たちが高等教育を受けて社会的上昇を果たす過程が描かれていることから、夫人がある時期からは旅を通じて学ぶ「世間の学校」よりも、「学校を通る出世街道」のほうに未来を見ていた可能性を指摘している（ジャック・オズーフ、モナ・オズーフ、前掲論文、二八一―二八二頁）。

（62）*Sans Famille*, éd.cit., p.331. アキャン氏の蔵書に旅行記（quelques récits de voyage）が含まれていたことは作品のメタフィクション的側面をうかがわせて興味深い。

（63）*Ibid.*

（64）おそらくナポレオン三世治下の一八五七年、法律により国家的な植林と製材・松脂産業の育成が指示されたころの光景であろう（参考サイト：https://fr.wikipedia.org/wiki/For%C3%AAt_des_Landes。二〇二二年一月二〇日取得）。

（65）*Sans Famille*, éd.cit., p.220-221.

（66）*Ibid.*, p.222. 「七里の大靴をはいた巨人」はシャルル・ペローの童話『親指小僧』に出てくる人食い鬼を指す。竹馬を使った牧羊業は十八世紀に始まり、植林の進展によって十九世紀の終わりに終止符を打たれた。乗った牧人の姿は多くの図版や写真におさめられている。

（67）われわれが先にヴィタリスの愛読書に似た類の書物の例として挙げたエティエンヌ・ド・ジュイの「地方の隠者」シリーズの第一巻「ボルドー・バイヨンヌ編」にも、ふさふさとした蓑のような上着を羽織って竹馬に乗る牧人への言及があり、遠くから眺めるとまるで「レストリゴン」（« Lestrigons »、ギリシャ神話の人食いの巨人族）のようだと書かれている（*L'Hermite en province*, t.1, Pillet Aîné, 1819, p.44）。

（68）Patrick Cabannel, *op.cit.*, p.272.

（69）L.N.A.*** et C.T. *** (Constant Taillard), *Les jeunes voyageurs ou Lettres sur la France en prose et en vers*, Lelong, 1821, t.6, p.129.

(70) Mme de Flesselles, *Les jeunes voyageurs en France ;histoire amusante, destinée à l'instruction de la jeunesse, contenant ce que la France présente de plus curieux*, P. Blanchard. 1822, t.2, p.73.

(71) *Sans Famille*, éd.cit., p.222.

(72) だがこうした書物は概してブルターニュ地方、オーヴェルニュ地方やリムーザン地方など、開発の遅れている地域の住民に厳しかった。批判はしばしば住民の気質（迷信深さ、無知、粗野、社交性の欠如）、風俗習慣（服装、清潔の観念の欠如）、方言、不毛な風土（生産性の低さ、産業の未発展、名所の欠如）などに向けられる。このランド地方についても例外ではなく、コンスタン・タイヤールの著書でも住民の「嫉妬しやすく迷信深い性質」、「飲酒癖」、「不潔さ」、「無知」などがやり玉にあげられている。しかも主人公の青年は、この「半ば未開の」（demi-sauvage）民に心づけを渡したうえで、竹馬に乗ったまま立ったり座ったり、地面の小石を拾ったり、曲芸のような真似をさせている（Constant Taillard, *op.cit.*, p.130 -132）。

(73) マロには先見の明があったのだろうか。パトリック・カバネルは、一八七七年から一九四〇年にかけて出た二十九冊のフランス周遊ものの中で、コート・ダジュールとモン・ブランと並び、ランド地方に言及した本が際立って多く、十六冊もあったことを指摘している。この地方は世紀半ばからの沼沢地の灌漑とマツの植林により風景が一変し、貧困にあえいでいた地域に産業（松脂採取、製材業）がもたらされた、奇跡のような国家事業の成功例としてもてはやされた（Patrick Cabannel, *op.cit.*, p.335-340）。

(74) 渡辺貴規子は『家なき子』の中でこの場面が「幽霊」、「怪物」など、科学的に証明できない怪奇な存在に言及している唯一の箇所である、と指摘している（前掲書、八二―八三頁）。

(75) 注（23）を参照。この映画ではヴィタリスは伝説的なヴァイオリニストで、レミは動物芝居で歌を担当し、ヴィタリスの指導のもと、美しい歌声を披露するようになるという設定である。初老を迎えたレミの住まい兼孤児院には、かつて歌手として名声を博した日々をしのばせる写真やポスターが飾られ、彼がその後歌手として活動していたことが暗示されている。